

[江戸時代の絵画展によせて]

宋紫石筆「ライオン図」について

宋紫石(1715~86)は18世紀の後半に江戸で活躍した絵師です。画名は唐姓を名乗っていますが、楠本幸八という江戸生まれの日本人です。三十代までの来歴はわかっておらず、中年にいたって、長崎に赴いたと考えられています。

宋紫石は長崎で二人の師に画法を学びました。最初に師事したの

ライオン図 宋紫石筆



は熊斐(1693~1773)、神代彦之進(のち甚左衛門)です。熊斐は唐通詞を務めながら、浙江省興興出身の絵師、沈南蘋に学びました。沈南蘋は享保十六年(1731)十二月に来日し、同十八年の九月に帰国しています。その濃彩で精緻な作風は、当時の日本人には驚くほど写実的でした。日本ではほとんど知られていませんでしたが、たちまち高く評価されました。沈南蘋の長崎の滞在は二年に満たず、熊斐が直接に指導を受けたのも短い期間ですが、その後も、来日した沈南蘋の弟子たちに学び、長崎の南蘋派の第一人者になっていました。

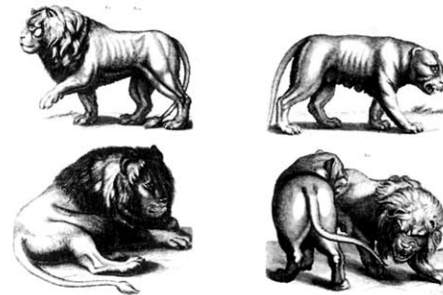
宋紫石の二人目の師は宋紫岩です。おそらくは沈南蘋の門人と思われる。宝暦八年(1758)には来日しており、宝暦十年七月に長崎の地で没しています。宋紫石の画名は、宋紫岩の名によって改名されました。宋紫石は長崎において、熊斐と宋紫岩の二人の師から、沈南蘋の画法を習得しました。この沈南蘋の画法、すなわち、中国の浙江地方で盛行していた写実的な画法が宋紫石の出発点です。

平賀源内(1728~79)は宝暦十三年(1763)に『物類品鑑』を刊行しました。宋紫石はその附図を描いていますので、宝暦十年前後には江戸に帰ったようです。平賀源内は物産、本草学者ですが、研究上の必要から、絵画にも高い関心をもっていました。『物類品鑑』は諸国の物産の解説書です。正確な図が求められ、物産を実際に見て描かねばなりません。宋紫石は平賀源内から絵師としての力量を認められていたことがわかります。

「ライオン図」はこのような平賀源内との交流から生まれた作品です。宋紫石はこの作品に次の自賛を記しています。「此獅子図 平賀先生秘蔵／蛮獣譜中所載と世之所



ヨンスター動物図譜 扉絵・挿図 神戸市立博物館蔵



／画者異蓋蛮人之写生云／明和五年戊子仲夏 宋紫石描」。この獅子図は平賀先生の秘蔵する蛮獣譜に掲載され、世間の獅子図とは異なるが、これこそ南蛮人の写生であるという意味です。「蛮獣譜」はポーランドで生まれたスコットランド人の動物学者、ヤン・ヨンスター(1603~75)の著わした『動物図譜』で、マテウス・メリアン(1621~87)の原図による多くの銅版画(エッチング)を掲載しています。初版はラテン語版ですが、1660年にアムステルダムでオランダ語版が出版されました。平賀源内は明和五年(1768)三月にオランダ人からこの本を入手し、早くも二ヶ月後に宋紫石によって「ライオン図」が描かれたこととなります。

『動物図譜』では一枚の扉絵と二枚の挿図に獅子が描かれています。これらは挿図の中でもとりわけ精緻な部類に属しますが、宋紫石はそのまま写してはいません。上目ずかいに睨む表情は、雌雄を組み合わせる図の雄獅子によるのですが、顔の向きは扉絵のケンタウロスが掲げる獅子の皮の頭部に近く、肩にかかる整った鬃はむしろ同書の洋馬図を思わせます。宋紫石は『動物図譜』の獅子や他の動物の表現をもとに、獅子の豊かな鬃、鋭い爪を表現するにふさわしい姿勢を合成(モンタージュ)しています。しかし、獅子の姿勢は『動物図譜』のどの図とも異なります。肋骨が露に浮き上がり、後足の膝が突き出した細い体や、片方の前足を上げる仕草は洋犬のようで

す。洋犬図は江戸時代の初めから日本でも描かれています。例えば、酒井抱一が西新井大師に奉納した絵馬に描く洋犬は、この獅子を反転させたような姿勢をとっています。宋紫石はすでにこの種の洋犬図を学んでいたのでしょうか。

獅子は基本的には南蘋派の画法に従って描いていますが、注目されるのは、頭部の入念な陰影です。この陰影は濃墨のぼかしと、艶のある黒と白い胡粉の細線によって施しています。ここには、明らかに銅版画の陰影表現が取り入れられています。「蛮人之写生」とは、この陰影表現のもたらす立体感を指していると思われる。

宋紫石はこの獅子を取りまく景観に、溪流のほとりを運んでいます。獅子との色彩的な対照を考慮して、全体を青味がかった色調にまとめ、近景、中景、遠景とはっきりとした諧調をつけて、空間を暗示しています。手前の岩は獅子の姿勢に合わせ、獅子の据わる岩はわずかに傾いて獅子との均衡を図り、対岸の岩と背後の岩山、遠景の懸崖は、大きくひねる上半身を囲むように支えています。この堅固な構成は、獅子をしっかり安定させるだけでなく、流れ落ちる滝とともに、画面に厳かな気分を加えています。まるで、紅毛碧眼の西洋紳士の肖像画を見るようです。堂々と胸を張る獅子の姿には、南蘋派、いわば「唐人之写生」に加え、「蛮人之写生」を学んだ宋紫石の自負心が重ねられているようです。(中野義隆)